



TITLE:

<大會抄録>北宋時代の官賣法下末 鹽鈔の京師現錢發行法について

AUTHOR(S):

幸, 徹

CITATION:

幸, 徹. <大會抄録>北宋時代の官賣法下末鹽鈔の京師現錢發行法について. 東洋史研究 1976, 35(3): 549-550

ISSUE DATE:

1976-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/153629>

RIGHT:

宋代における穀物の粗色と細色について

小野寺郁夫

幸 徹

唐代における穀物は、粟を基本とし、その他に雑種・雑色・雑穀等があった。また穀物間の換算には、比率を立てる場合と時價による場合とが存在していた。比率については、量において、粟一〇に對して粟米六が用いられ、「九章算術」や「居延漢簡」等に見られるものと同様である外、開元二五年（七三七年）に、粟一〇・稻穀一五・糙米七が得られる。それ以外については明かでない。

それでは宋代における穀物は如何に取扱われていたか。大略次の二點について考察した所を述べてみたい。第一に、宋代の穀物は主として粗色（雑色・賤色）と細色に大別され、前者は粟・大麥・蕎麥・黑豆・麻穀等から成り、後者は粳米・小麥から成っていた。そしてその區別は、租税の徴收、穀物の買上げ、その運搬・貯藏、更に賑貸、捕蝗の代償、官僚の俸給と、穀物を周る様々な事象に見出される。

第二に、粗色と細色を換算するには、一定の比率が立てられている。その比率は倉式（倉式例とか倉例として用いられる）に定められていて、量において粗色一〇に對して細色六であった。

以上によって、宋代における穀物の取扱いが唐代に比べて一層整備されて來ており、粟は粗色に組入れられ、細色の有用性が増大していることを知ることができる。

北宋時代の官賣法下末鹽鈔の京師現錢發行法について

唐末以來の北方民族「契丹」對漢民族の抗爭關係は、宋初の「澶淵の盟」によって收束されたが、軍事力を背景とする和平という國際關係上、北宋は遂に北宋末に至るまで、北方國境地域に數十萬人の軍隊を配備する體制を続けなければならなかった。これに西北方民族「党項」の興起が加わると、百萬に近い軍隊を配備し続けることとなる。

此の數十百萬人の軍隊の補給には年間一千萬貫を超える經費を要するが、その總べてを北方地域州縣のみで負擔することは出来ぬから、相當額の中央財政による負擔が必要となる。此の中央負擔分國境警備費は、對契丹方面分だけでも年間三・四百萬貫に達するが、その負擔分は現錢乃至は物資として國境地域にまで運送されるわけではなく、國境地域の軍需食糧の納入に動く商人の持參する「糧草交鈔」に對する支拂として都開封府で支拂われることとなっていた。このような中央財政による糧草交鈔への支拂は、宋初にては茶鹽香藥などの物資交鈔によって行われていたが、略五十年を経た仁宗天聖年間になると、京師現錢によって行うことが可能となった。

商人に對する現錢支拂は財政支拂の良法である。何故糧草交鈔に對する京師現錢支拂が財政的に可能となつて來たのか。京師現錢收入と現錢支拂との均衡の成立の事情や、對西夏戰勃發による京師現錢收支均衡策の停止とその後の再建の問題などを考察し、併せて熙

寧元豐の新法から北宋末期蔡京の通商鹽法に至るまでの問題點にも觸れる。

趙紀彬氏の近業をめぐって

小 倉 芳 彦

批林批孔運動が高まって以後、趙紀彬氏は『關於孔子誅少正卯問題』（一九七三年九月）、『論語新探』（第三版、一九七六年三月）などで、舊來の文字學訓詁學の成果を細密に利用しつつ、春秋過渡期における孔子の言説の意味づけに大膽な論定を加えるという特異な學風を展開している。こういう趙氏のような學風を、われわれは中國學術史の流れの中でどう受け止めたらよいのか。學會の研究報告の體は成さぬと思うが、この機會に諸賢のお教えを請いたい。

クシヤン王朝とガンダーラ美術

小 谷 仲 男

最近、アフガニスタンの西北部、アム河岸でアイ・ハヌムとよばれるギリシア人都市址が発見された。目下、フランス調査團の手で發掘がすすめられているが、その第一―四次（一九六五―一九六八）の調査報告が *At Khanoum I* (MDAFA, XXI, Paris 1973) と

して出版され、また年次報告の *Comptes rendus de l'Académie des Inscriptions* に逐一發表せられ、興味ぶかい成果がうかがる。

遺跡の規模は、東西 1.6Km、南北 0.8Km の平地（下市）と、小高い丘アクロポリス（上市）とからなり、平地には官衙ふうの大きな建物、廟、神殿を中心に、周邊に半圓形劇場、競走場、體育館、邸宅などがあり、コリント式石柱、屋根瓦、大小の彫塑、貨幣、ギリシア語碑文などはみな真正ギリシア人の生活をものがたる。

この都市の創建については、アレキサンダーがアジア遠征中にたつた *Alexandria Oxiana* とするか、あるいはセレウコス一世の時代とするか、各説があるが、いずれにせよ B. C. 300 年以前の創設で、しかもその主人公がキネアス *Kineas* というテッサリア出身のギリシア人であったことも碑文から推定されている。

ここで私が關心をいだくのは、このギリシア人都市がいつ、どのようにして滅んでいったか。中國史書の大夏を征服したという大月氏との關係、あるいはクシヤン王朝、さらにはこのギリシア文化とガンダーラ佛教美術との關係である。

吐蕃占領初期の敦煌文獻について

土 肥 義 和

敦煌出土の漢文文獻は、吐蕃が敦煌を占領した七八七年（別説に